

## 里山里海の文化と生態系サービスの変遷

本 田 裕 子

千葉県生物多様性センター

### 1. はじめに

里山里海は文化において重要な意味を持っていた。日本語の「文化」は英語の“culture”の訳であり、これは“cultivate”（耕す）から派生している。「耕す」行為、すなわち、自然へのかかわりや働きかけを通じて生み出された里山里海と、その中での人々の生活のすべてが、里山里海の文化といえる。

2001～2005年にかけて地球規模で実施されたミレニアム生態系評価（MA）では、生物多様性が私たち人間の暮らしにどのようなかかわりがあるのか、「生態系サービス」という概念が用いられた。生態系サービスにおいて、生態系からもたらされる文化・精神面での恵沢は「文化サービス」に分類されている。

本報告では里山里海の文化がどのようなものか、を示すとともに、「日本における里山・里海のサブグローバル評価（里山里海 SGA）」における「文化サービス」の指標である「信仰」「伝承知識・技術」「慣習・行事」「子どもの遊び・レクリエーション」に準じて、千葉県を中心とした里山里海の文化サービスの変遷を整理した。

### 2. 日本における自然と人のかかわりの特徴

ヨーロッパにおいて森林（forest）の語源は、foreignと同じであり、元々「生活圏の外」を意味する（鈴木，2006）。このような自然と人間を切り離して捉える自然観とは対照的に<sup>註1)</sup>、日本の自然観は自然と人間とを一体として捉えてきた（松尾，2006）。例えば、「支配するものと支配されるものの関係を超えて、＜共生＞＝共に生きる関係」（間瀬，1998）とされる、「共生」という概念は、日本の浄土宗僧侶椎尾弁匡（1876－1971）が最初に用いたといわれている（竹村，2006）。欧

米では、coexistence「（時間や場所において）共に存在する、共存」という概念は存在しても、両者のかかわりを前提にする「共に生きる、共生」という概念は近年ではco-livingやliving togetherという訳語もあるが、基本的にはcoexistenceとして認識される。このような自然観の違いの背景にあるのは、自然環境の違いがあり、キリスト教、イスラム教など一神教は、大地が比較的やせており、人々の「自然と対決する」「自然を乗り越える」姿勢から生成されたと考えられている（和辻，1979）。そうして培われた認識が、自然とは克服すべきもの、解明されるべきものなどという考えにつながったといえる<sup>註2)</sup>。

一方で、日本などの温帯地域や、熱帯・亜熱帯地域では、自然が豊かであり、人々も生活用品を含め、自然に依存した生活を送ることができた。このような地域では、自然は恵みをもたらすものと位置づけられていたといえる。例えば、千葉県には、野生動物、具体的には牛や馬、鳥（鶉、鶉、鶉）や蛇等に因んだ地名が現在でも残されており、かつて人々がこれらの野生動物とのかかわりを持っていた証しといえる。

### 3. 里山里海での暮らし

里山里海において、人々は長い歴史を通じて、自然と直接的にかかわる生業を営んできた。山では狩猟、炭焼き、田畑では米づくりを始めとする農業、海や川、湖沼では漁業を行ない、自然環境に応じて多様な利用形態が生まれた。そして、これらの生業は個別に成り立っているのではなく、例えば、化学肥料が普及する以前は海藻や魚（干鰯）が田畑の肥料になるなど、資源が循環することで、密接に連環していた。

里山里海は、現在でも米や野菜、魚介類な

どが私たちの食生活を支えているが、かつては、里山里海のより多くの野生動植物が食卓に上った。沼ではシジミ、ウナギ、コイ、水田では、フナ、ドジョウ、タニシ、そして畦では春の七草などが食材となった。また、野鳥では、ヒヨドリ、スズメなどを、子どもたちが青竹と藤ヅルでつくった「おっかぶせ」などと呼ばれるわなで獲った。

東京湾ではアサリ、ハマグリ等の二枚貝やハゼ、アナゴ、カレイ、クルマエビ等の魚類が獲られ、「江戸前」というブランドで都市という消費地に送り込まれていった。また、古くから製塩業もさかんであったが、江戸時代には塩という里海の恵みと里山の恵みを結びつけた醤油の大生産地が東京湾流域に生まれることができた。

食糧調達のための釣りは、江戸時代には遊びとしての要素が含まれるようになった。例えばかつて東京湾に生息していたアオギスは「幻の魚」といわれるほど釣るのが難しく、食べるためというよりも釣る楽しみであったといわれている。

内山 (2007) は、戦後の高度成長以降、進学率や情報のあり方の変化、都市の隆盛と村の衰弱によって、1965年頃を転換期として、いわゆる「キツネにだまされる」ことがなくなったと述べている。「キツネにだまされる」とは、里山での人々の自然観・信仰観・死生観を反映したものといえる。すなわち、里山里海の文化には、動植物を含め自然への畏敬が根底にあり、自然は単に資源利用される対象ではなく、信仰の対象でもあった。そこから、資源管理における節制利用や組織化を通じた協調利用、自然から学び、その知恵を生活に活かすという姿勢が生まれた。このような人々の自然との接し方は、多くの生き物の生息をつくり、結果として豊かな生物多様性を育ててきたといえる。

#### 4. 里山里海での信仰

里山里海では古くから、村の祭り主として神が信仰されてきた。祭りとは、神霊を招き迎え慰める集団的な行ないであり、多くの神霊が農業・漁業と結びつき、豊穰への祈願や感謝、または盆行事に見られるように先祖への感謝・供養の行事である。これらの祭りや行事は、神霊の宿る自然環境を保全するという共通理解とともに四季折々

の自然の変化の中で適切な生業時期の記憶や、陸と海とのつながりの重要性を認識させる役割を果たした。また、日常生活から解放され、娯楽・慰労の役割や人々との結びつきを強める役割もあった。このような祭りや芸能行事は、人々への精神的安らぎや安心とともに自然を守り育む「里山文化」をもたらした。山の神、田の神や水神に代表される里山里海の信仰は、自然を恐れ敬う「畏敬」の念をも育み、人々にとっての生物多様性の理解と節度ある利用につながった (ショート, 2003)。

そもそも「神」は、Godの訳語として明治期に登場したとされる<sup>注3)</sup>。カミの意味としては、①雷、②虎・狼などの猛獣、または妖怪、③山、を指すとされ、特徴についても①唯一の存在ではなく、多数存在、②具体的な姿・形を持たない、③漂動・彷徨し、時に来臨し、カミガカリする、④それぞれの場所や物・事柄を領有し支配する、⑤超人的な威力を持つ、⑥人格化との併存を指摘している (大野, 1997)。

宮田 (1994) は、神の特徴を、本居宣長の指摘 (神を「尋常 (よのつね) ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物」と規定。「すぐれたる」とは尊いとか善いことだけではなく、「悪きもの、奇 (あや) しきもの」を表現する) に基づいて、尊と賤、強と弱、善と悪という対立項を併存している、と指摘している。また、神と妖怪との関係から、「日本の場合、神は妖怪に転化するし、妖怪もまた神に変化することが可能」とし、神の善悪具有の性格を説明している。

「氏神と氏子」について講演した柳田 (1999) は、「神社は本来村の構成の一部であつて、部落は作つたが神社はまだ無いといふ場合は稀有である」と述べている。このように、日本の村々において、神への信仰は生活と一体であった。

前述の通り、里山里海において人々は生活の中で、自然を水の神、山の神、田の神などとして信仰の対象にした。これらの神は、水に住む動物や山に住む動物、田畑に出没する動物が化身となることもあった。水の神ならば蛇、龍、亀や鱉や蟹などに化身し、山の神ならば猿、猪、狼、熊、山犬、大蛇などに化身する。狐などは田畑に出るので穀霊の化身とされ、やがて稲荷の化身

となったと考えられている。以下、代表的なものを整理した。

### 1) 山に関する信仰

伝説上の巨人とされる「ダイダラボッチ」（大太法師）は、一夜で富士山を造ったなど、山や泉に深く関わる伝承が多く、関東中部を中心として各所に、足跡と称する窪地や沼などがある。房総半島でも伝承が残されており、まくらにした富山は、中がへこみ北峰と南峰とにわかれ、岩井海岸は、大太法師の足の砂で遠浅になったこと、房州の小島は大太法師の足からこぼれおちた土でできたのだとも言われている。（「南房総資源辞典」, <http://www.mboso-etoko.jp/dictionary/article.php?flg=2&code=493> 2010年2月23日確認）。

また、房総丘陵各地には、「山の神の日」という行事がある。地域によって、時期は様々だが、例えば清澄山（鴨川市）では2月7日が「山の神の日」とされ、その日は山の神を祭り、1日山仕事を休む。この日には、「山の神が木の種を播く」、「山の神が猪に乗って、播いた種の成長を見回る」という説がある（高橋・平野, 1974）。

### 2) 海に関する信仰

古来より、海と陸地の接点である渚は、現世と他界との接点であり（谷川, 1990）、神を迎え交わる場と見なされ、様々な信仰儀礼や行事が行なわれてきた。海に囲まれた千葉県でも、「海の神」、「船霊さま」が信仰され、捕獲した鯨の供養塔や誤って殺してしまった海亀の墓なども建てた。そして、豊漁の神や疫病除けの神として広く信仰されたアンバ様のように、漁民同士の交流の中で、信仰そのものが伝播していく状況もみられた。

「海の神」として漁民から神聖視されていたのは山であった。高橋・平野（1974）によると、東京湾の漁民は古くから山を神聖視し、山の社寺は信仰の対象となった。海上において山は、目標との距離を見る上で目印となり、自分の船の位置はもちろんのこと、魚介類の生息域や危険域の判断ができる。例を挙げると、船橋大神宮の森（船橋市宮本）、八幡さまの森（市原市八幡）、三石山（君津市草川原）、鹿野山（君津市鹿野山）、鋸山（鋸南町）がある。「船霊さま」とは、生業の神であり、

御神体は船に、船の守護神として信仰されている（館山周辺は「オフナサマ」、市原周辺は「フナガミサマ」）。（高橋・平野, 1974）。

### 3) 田の神

水田では、豊穰を祈願し、収穫を感謝して「田の神」が祀られた。「田の神」とは春になると山から里に下りてきて、田畑の恵みをもたらす神であり、秋の収穫が終わると山に戻り「山の神」になると考えられていた。したがって、稲作の作業に沿うように様々なお祭りや行事が行なわれた。「田の神」は各地で様々な呼称があり、農神、作神、百姓神等と呼ばれたり、他の信仰と結びつき、七福神に由来して恵比寿様、五穀を司る食物の神に由来して稲荷神などと呼ばれることもある。

### 4) 水神・水の神

稲作に欠かせない水は、「水の神」への信仰と密接に結びつき、水の恵みへの感謝だけではなく、水源の保全や水害の回避を願い、祀られた。集落の井戸や湧水地にも水神・水の神は祀られ、また、水の流れるせせらぎも、心を癒し鎮め心よりどころとして信仰を集めた。水神・水の神は、多くは大蛇や龍あるいは鰻などの魚の姿、またはインドの河神に由来する弁財天として信仰され、水の恵みへの感謝や願いだけではなく、水の神の怒りを鎮め、水害が起きないように祀られた。

### 5) その他の信仰 I : 馬頭観音

水田稲作には、機械化される以前は馬が用いられてきた。水田稲作以外にも、馬は山から木を運び出す作業や肥料に欠かせない下肥を運ぶ作業の運搬など、里山里海の生業において重要な役割を担っていた。このような人々と馬とのつながりは、「馬頭観音」として信仰に表れている。農耕の豊穰、馬の供養、旅の安全を願うものであり、馬の守り神としての信仰が多いと言われている（千葉県, 1999）。千葉県では、馬頭観音が馬に乗った「馬乗り馬頭観音」が多く残されており、その理由はいまだ謎であるが、江戸時代、小金や佐倉の牧が設置されるなど、馬の飼育においてもかわりがあるためとも考えられる。

6) その他の信仰Ⅱ：牛，鮭，鯛，鯨

千葉県において、動物が儀礼や信仰の対象にされている事例の一例を、表1にまとめた。

5. 伝承知識・技術

1) 民俗知識

里山里海に関する民俗知識を（長澤，2001；2005）をもとに整理した（表2・3・4・5）。いずれの表からも、飛来や鳴き声で時期を知るなど、特に鳥類や哺乳類に関するものを多く抽出できた。他にも昆虫や爬虫類・両生類なども数多くあり、かつての人々が頻度はもちろんのこと、注意

深く自然や動物を観察していたことがわかる。そして、植物に関しては、魚をとるのに利用することを含め、その特性、例えば毒性があることを把握し、利用していた（長澤，2001）。このような特性は、現在のような識字率や情報伝達手段があるわけではなく、人から人へ直接伝承していったといえる。かつて里山里海では、人々は動物・植物を最大限に利用・活用していた。そのような関係が、人々と里山里海との間に存在していたことがわかる。

2) 伝承技術：樽，上総掘り

伝承技術として、まず、樽生産を挙げる（乙竹

表1 千葉県における動物が儀礼や信仰対象となっている事例（一例）。（千葉県教育委員会，2002），千葉県商工労働部観光課「ちばの観光まるごと紹介」<http://www.kanko.chuo.chiba.jp/kanko/2399/>（2010年2月23日確認）より作成。

牛	「牛洗い」(6月7日：現在は9月10日)	鴨川市(代地区八雲神社)
	・神殿内におさめられている「白牛」像を、「洗い場」(曾呂川河畔)まで奉持し、区長から順番に、笹の葉で頭や体を撫でて洗う。	
	・江戸期に地域に疫病が流行り、その防疫のために行なわれた。牛そのものの災難よけ、無病を祈るために行なわれたともいわれる。	
	・この地域は、「嶺岡牧」の場所であり、徳川吉宗がオランダから、インド産の白牛3頭を輸入し、この牧で繁殖させたと伝えられている(この白牛からバターを製造し、将軍に献上した)。この一帯が酪農発祥の地ともいわれており、牛を大切に扱い、息災を願う行事が生まれたと考えられている。	
	・この地域では白い牛を使わず、この行事が終わってから、各戸の牛洗いが行なわれた。	
	・この行事の前に、農耕用の鞍をつけない牛を川で洗ってはならないといわれる。	
	・近年の護岸工事でも、「洗い場」だけ川面に降りられる道がつくられている。	
鮭	「山倉の鮭祭り(山倉神社の初卯大祭)」(12月5日)	香取市(旧山田町山倉)
	・山倉地区に流れる山倉川は栗山川の支流であり、奉納される鮭はこれらの川に上がった鮭であった(今では他の川の鮭も奉納される)。	
	・由来は、811年にこの地域に流行した疫病退散の祈願の生贄としてサケが用いられたとのこと。	
	・宵宮祭の日の午前中から夜にかけて神饌の鮭の調理が行なわれる。鮭を小さく切ったものを護符として頒布する。祭礼の後、鮭の頭や骨などを黒焼きにして、粉末状にしたものが頒布される。	
	・町の無形文化財に指定	
鯛	「鯛の浦」	鴨川市(天津小湊町)
	・日蓮誕生の時に鯛が集まり、波間をはねて祝ったことなど日蓮ゆかりの聖地。	
	・沿岸漁民が鯛を殺生禁断の対象にし、給餌の約束をして保護してきた。	
	・鯛の群生地であり、国の天然記念物に指定されている。	
鯨	「長性寺の鯨塚」	南房総市(千倉町)
	・古くから、鯨は神様から授かった大切な恩恵と捉えられ、霊獣とされた。	
	・1896年に鯨を捕獲した際に、肉は食用として住民で分配し、心臓部を埋葬した。現在でも住職・檀家により大切に管理されている。	

ほか、2003)。江戸期以降、酒や醤油などの醸造業の発達には貯蔵や輸送において樽の存在が大きかった(貯蔵・輸送)。樽の材料(ガワイタ・底・蓋)は一般的に杉で、近隣の山林から調達することもあったが、吉野杉でできた灘の酒樽を再利用することもあった。樽の材料として使う竹は、利根川を利用して、埼玉・栃木産が多く使われた。杉や竹の端材は、銭湯の炊きつけや農家への炊きつけとして売られた。昭和初期には職人1人で日8樽完成させることが標準とされてきたが、機械化が進み、また、樽からびんやプラスチックな

どの容器との競合の中で、現在では職人の廃業や一貫して作業の行なえる職人が消滅している。

次に挙げる、千葉県上総地方で伝承された井戸掘り技術が明治期に改良を加えられ考案された「上総掘り」は、水田灌漑に欠かせない深井戸掘りの技術である。この技術は安全で簡便ながら地中1000mも掘れ、台地・丘陵での水の確保が容易となった。また、材料としてはモウソウチクを使うので、里山に繁茂する竹を有効利用しているのが特徴的である。現在では、減反政策等による水田面積の減少や、ボーリング式の井戸掘り技

表2 植物に関する薬利用(長澤, 2001より作成)

症状・効能	植物名	説明
切傷・止血薬	ヨモギ(クク科)・フキ・イタドリ(タデ科)	山仕事や農作業の折に切傷した時、即座に現場で間に合う止血薬の薬草を採って傷口に付け、手拭を裂いて患部を縛るなどの応急手当をした。
	チドメグサ(セリ科)	[木曾谷、北安曇郡小谷村、佐渡地方]葉を採ってもんで患部へあてる。
	ノリウツギ(ユキノシタ科)	[下伊那郡の遠山郷]葉を採ってもんで患部へあてる。
	ヤマブキ(バラ科)	[木曾の開田]茎の汁を傷口へぬる。
打身・打撲	ニワトコ(スイカズラ科)	打撲・打撲や骨折等の薬草。
	スイセン・ヒガンバナ(共にヒガンバナ科)	両者は共に地下の鱗茎をすりおろして小麦粉でねり、紙にのぼして患部へ貼る。
	ネムノキ(マメ科)	上田地方では木部を黒焼きにして、小麦粉でねって貼る。
胃腸カタルなど急性下痢	キンミズヒキ(バラ科)	[比較的多くの地域]根を煎じて飲む。
	ハリブギ(ウコギ科)	[乗鞍山麓の番所]根の皮を煎じて服用。
	イタヤカエデ	[富山県黒部川流域の音沢]樹皮を煎じて服用。
腫れものの吸出し	アオキ(ミズキ科)	皮膚の下の深い所に芯があって腫れて痛む病気の膿の吸い出しの薬草としてアオキの葉を用いる地方が多い。
	ムクゲ(アオイ科)	[下伊那地方、秋田県]葉を火にあぶって同様に患部に貼る。
	タケニグサ(ケシ科)	[戸隠、鬼無里村]葉を焼いてその粉を小麦粉とねって紙にのぼして貼る。
	シシガシラ(シシガシラ科)	黒焼きにして石灰と混ぜて貼る。
とげ抜き	ナツメ(クロウメモドキ科)	[長野県下伊那地方の阿智・喬木]この果実の皮をとり患部へ貼りつけるか、干したものを傷口へ貼る。[遠山地方]果実をすって患部へ塗る。
	ニシキギ(ニシキギ科)	[長野県下伊那地方や佐渡ヶ島]木部を黒焼きにしてその粉を飯粒とねって患部へ貼る。一〜二時間もすると痛くなってくるので、貼った紙をはぐと、局部が白くなってとげが浮き出しているのが簡単に抜くことができる。
目薬	メギ・ナンテン(メギ科)カワラケツメイ(マメ科)メグスリノキ(カエデ科)	かすみ目・ただれ目の眼病にはメギ・ナンテンカワラケツメイの枝葉や種子を煎じて、その液で洗眼したり湿布をする。メグスリノキの皮を煎じて飲む法も全国的に広く行なわれている。
いぼ取り	タケニグサ(ケシ科)	茎を切ると出る黄褐色の液を患部へつける。
がん予防と制がん	コフキサルノコシカケ・カワラタケ・カイガラタケ	昔からガンはあって、民間薬ではこれらを制ガン薬としてもちいられている。
	ノキシノブ(ウラボシ科)	[下伊那地方]干して飲んでいる。
扁桃腺	センニンソウ(キンポウゲ科)	[長野県下]葉を手首のところに貼る。生葉のない時には葉を干しておいて、それを温水中に浸して使う。貼った所は一時的に火ぶくれになるが、不思議とどの痛みはとれる。
あかぎれ	スギ・サイハイラン(ラン科)	スギの木から出るヤニやサイハイランの球根をすりおろし、皮膚の一部が切れて血がにじんで痛くなっている傷口へ塗って治療した。どちらもワカ質のねばっこい液である。
やけど	ユキノシタ(ユキノシタ科)	[長野県の一部の地域]生葉を採り、薄皮をとって患部へ貼る。
	アオキ(ミズキ科)	葉をもんで出た汁を塗るか、干しておいた葉を粉にしてゴマ油でねって患部へ貼った。

表3 気象に関する民族知識（長澤，2005；高橋・平野，1974より作成）

		対象	備考
自然		富士山が見えるときはだいたい天気が良い	
		対岸の神奈川県のほうが見えると天気が良い	
		東京のほうが見えるときは風が変わる	
		筑波山が見えるようになると風が強くなる	
		空が澄んで無風の夜は冬だと霜、梅雨ごろは霧	
		朝虹は雨、夕虹は晴	
		星が流れたり、きらめくと風が強くなる	
		三日月が平らに見えると雨が近く、ななめに見ると風が強い	
		遠くの汽笛が聞こえたと雨が近い	
		朝の霧は十時までに晴れる	
動物	哺乳類	猿が里や人家近くへ出ると天気が変わり明日は雨	長野県内の諺。全国的にも同じ。
		猿が下りてきて鳴くと明日は雨	全国各地の俚言。
		イタチが出れば天気が変わる	長野県北安曇地方の諺。
		鶏が早くねぐらにつくと次の日は晴、遅くねぐらにつくと雨	
		長雨の後、とんびや鳥が鳴き出すと上がる	
		嵐の前には鳥が騒ぐ	
		コツカルの洗いう	沖縄県八重山地方の諺。コツカルはアカショウビン。洗いうは梅雨のはしり雨。
		ナンバン鳥が鳴くと入梅	ナンバン鳥はアカショウビンの方言、この鳥が渡ってくると梅雨に入るといふ新潟県中越地方の諺。
		マオが鳴くと必ず天気が悪くなる	青森県恐山地方の俚言。マオはアオバトの方言、アオー、アオーと気味の悪い声で鳴く。
		ホウホウ鳥が鳴くと晴れ	新潟県中越地方の諺。ホウホウ鳥はツツドリ
	鳥類	ミンツョが家の近くで鳴くと明日は雪だゾ	長野県白馬山麓や中信地区の広い範囲での諺。ミンツョはミンサザイ。
		ミンツェリンが家のそばで鳴くと明日は雪だ	新潟県中越地方の諺。ミンツェリンはミンサザイの方言。
		ドウが来たすけ天気が悪くなる。ドウが通ると大雪振り、ドウ雪八尺	いずれも新潟県中頸城郡松代地方の諺。ドウはトキの方言で、この地方では大正の初めまでトキが飛来してきていた。
		ミンサザエが軒端を飛び回ると雪が近い	富山県の下新川郡、黒部市、婦負郡(ねいくん)などでの俚言。
		アマ鳥が出たら川越えるな	富山県黒部市田羽の諺。アマ鳥はイワツバメで、急に群れて飛翔するときに雨が降り、川は増水するといわれている。
		アマツバメが出ると天気が変わる	北アルプスの信州側の諺。アマツバメは雨燕で、岳山の崖に集団で営巣している。「出ると」は集団で探餌に里の上空に現れること。
		ツバメが低く飛ぶと雨が降る	全国的な諺。
		キツツキのトチの実転がし	秋田では春から夏のころに山に入ると、キツツキのコロロローン、コロロローンという音を聞く。この音を聞くとき木こりは、「キツツキのとちの実転がし」とか、「キツツキのとちの実はかり」(トチの実を食ですくい、袋に入れる時の動作に似る)といいて、まもなく大荒れのある前兆だとあつたふたと山を下りるという。
		水恋い鳥(アカショウビン)が鳴くと雨が降る	長野県内の広い地域での俚言で、これは全国的にいう。
		一足鳥が朝群れて洞を出るとその日のうちに雨が降る、夕方群れて出れば明日は晴天なり	熊本県球磨川の鍾乳洞近の諺。一足鳥はイワツバメの方言。
	両生・爬虫類	アマツバメが群れ飛ぶから雨になるだろう	和歌山県有田郡の諺。長野県中信地方でも同じ。
		小鳥が宿へ早く着けば天気がよい、遅くつくと天気が変わる	全国的な諺。鳥類の習性で、雨の日の前日は十分に餌を採るため。
		山鳥が尾を引いた(青白い火を出して飛ぶ)で天気が変わるゾ	長野県内
		蛇が木に上ると雨	
		蛇が多くでると地震の少ない年である	
		海亀が卵を海ぎわで生むと台風はこない	
		大尺唄いて七十五日	長野市辺の諺。トノサマガエルが九月中旬に一斉に鳴く時があるが、それから七十五日すると根雪になると言っている。
		アマガエルがはげしく鳴くから雨が来るゾ	全国的な諺。
		ガマが遠い出ると雨が降る	長野県北安曇地方の諺。ガマはヒキガエルの方言。
		ヘビが日向ぼっこをしていれば明日は雨	長野県北安曇地方の諺。
	ヘビがたくさん出れば天気が変わる	長野県北安曇地方の諺。	
	魚類	鯉がとび上ると雨	
		魚がとび上がるは雨の前兆	全国的な諺。
		魚がよく釣れる日の翌日は雨	全国的な諺。
		天気の変り目には池の鯉が浮き上がる	全国的な諺。
		タニシの願ひ立て	長野県東北部の諺。桃の節句前に大荒れする天気を言う言葉で、この地方では昔から桃の節句にはタニシを拾ってきて料理してお雑炊に供え、みずからも食べるのが習慣である。そこで悪天候で川が濁ってタニシが拾えなくなるのをタニシにかこつけて言う言葉。
		フヨが出ると雨	
		蜂が多く、また巣を高い所に作るとその年は台風がこない	
		ホタルの幼虫が岸に登ってくると大水が出る	富山県魚津地方の諺。
		アリが行列を作って道路を横切れればやがて雨降らん	和歌山県ほか、全国的な俚言。
アリが宿替えをすれば三日の内に天気が変わる		長野県内。	
蚊のもちつき雨の兆	全国的な諺。「もちつき」は集団で上ったり下がったりを繰り返し行う動作。		
昆虫	夕方フヨが群れになって騒ぐと明日は雨	長野県中信地方の広い地域での諺。フヨはフユの方言。	
	雷虫が舞うと雪がくる	長野県木曽福島町の諺。全国的に所々の地域で言う。	
	カマキリが高い位置に巣を作る年は雪が多く、低い所へ巣をかける年は雪が少ない	新潟県ほか、全国的な諺。	
	夜、羽アリや虫がたくさん電灯に集まる時は夕立が近い	長野県下全域の諺。	
	ノミが騒ぐと天気が変わる	長野県下全域の諺。	
	ゼミが鳴くと雨が降っていても天気が良くなる	長野県下全域の諺。ゼミはエゾノハルゼミ。	
	ハチが高い所へ巣を作る年は雨が多い	長野県中信地方の諺。	
	家の中へムカデが出てと雨が降る	長野県北安曇地方の諺。	
	ミミズがころげ出ると百日の照り	長野県北安曇地方の諺。	
	アリが土を食い出す時は天気が続く	全国的な諺。	
クモが夕方網を張ると明日は晴れ	長野県北安曇地方の諺。		
植物	梅の花が下を向いて開くと雪年である		

表4 農業に関する民族知識（長澤，2005；高橋・平野，1974より作成）

対象		備考
<b>自然</b>	雪の多い年は豊作	
<b>動物</b>	雪白水が海に入ると白鳥が北へ去る	青森県小湊地方の諺。雪白水は雪融水で、ぼつぼつ種粃を浸す時期。
	ウグイスの声を聞いたら苗代に種を蒔け	山形県最上郡東小国地方の昭和初めのころの諺。
	ダオが渡って来たから田の支度にかかろう	青森県大畑地方の大正初めのころの俚言。ダオはトキの方言で、当時は普通に見られた。
	麻蒔鳥が鳴き始めたから麻を蒔かねば	福岡県雷山地方の大正時代の俚言。麻蒔鳥はツツドリで、ぼんぼんと鳴く。
	豆蒔鳥が鳴くから豆を蒔かねば	近畿地方の昔からの諺。豆蒔鳥はカッコウのこと。長野県、新潟県東蒲原郡、青森県下北郡で同じ。
	カッコウが啼くから大豆を蒔かねばならぬ	長野県下の広い地域での俚言。青森県大畑地方でも同じ。
	トットが鳴き出したから粟を蒔け、カッコウが鳴くから豆を蒔け	青森県下北地方の諺。トットはツツドリ、岩手県早池峰山麓も同じ。
	カッコウが鳴くから粟を蒔け、トットが来たから豆を蒔け	青森県中津軽地方の諺。
	イモオヤシが鳴いたぞ	愛媛県北宇和郡辺の諺。イモオヤシはアオバズクの方言で、この鳴き声で農家は里芋を植え付けるそう。
	トットーが鳴くから稗を蒔け	トットーはツツドリ、青森県大畑。
	ケトケト(ヨタカ)が鳴けば手苗を捨てて豆を蒔かねばならぬ	和歌山県下。
	トットに籾蒔き、カッコウに粟蒔き、ホトギスに田を植えよ	秋田県北秋田郡地方の諺。トットはツツドリの方言。
	稗の葉のスズメ隠れに稗蒔き	佐渡金北山麓の諺。稗の木にスズメが来て止まっても葉が繁って見えなくなる。
	アオバトが盛んに鳴くから田植えも終わり近くなった	青森県下の昭和は初めのころの俚言。
	モズが鳴くと栗が笑む、富士が白くなると甘藷が甘くなる	東京都北多摩地方の諺。笑むは熟して口が開くこと。
	麦蒔鳥が来たから麦を蒔かねば	千葉県・茨城県地方の諺。麦蒔鳥はセキレイの方言。セキレイは夏の暑い時は山間の溪間に移って暮らし、秋冷のころになると里に下りてくる習性がある。
	豆蒔鳥が鳴いたら豆を蒔け	新潟県中越地方、長野県下の広い地域の諺。豆蒔鳥はキジバトの方言。
	サツキ鳥が鳴いたら田打	新潟県中越地方の山村の諺。サツキ鳥はカッコウの方言。
	カッコウが鳴いたら刈敷刈を始める	長野県大町温泉郷の辺の諺。刈敷は田へ入れる緑肥。
	ツバメが来たなら田に水を入れ、種粃を蒔け	長野県松本地方の諺。
ウグイスが鳴いたらウグイス菜など春野菜の種を蒔く	長野県中信地方の諺。	
ヤマバトが鳴いたら豆を蒔け、カッコウ鳴いたら豆を蒔け	長野県中信地方の諺。	
<b>両生・爬虫類</b>	甘藷の新蔓の押し植えころはヒラクチの出盛り、大豆の採り入れ時がヒラクチの最も荒れるころ	熊本県玉名郡での諺。ヒラクチはマムシの方言。
<b>魚類</b>	豆蒔きウグイ	青森県下北郡田名部辺の諺。田名部川にウグイが遡る時が大豆の種蒔きの最盛期で、同時だから。
<b>昆虫</b>	春ゼミが鳴いたら早生小豆の種を蒔け	新潟県小千谷地方の諺。「エゴマを蒔いてよい」とするのは長野県中信地方。
	ツクツクボウシが鳴くと柿が甘く熟してくる	新潟県の広い地域で。熟柿(ジクシ)々々と鳴くという。
	稲刈りトンボ(アキアカネ)	新潟県の広い地域の俚言。このトンボを麦蒔きトンボと呼んで蒔きの目安にしている地域もある。
	粟蒔きゼミ	山形県東小国地方の諺。このゼミはハルゼミのことで、この声を聞いて粟蒔きを行ってきた。
	秋ソバの花盛りに赤蜂の巣を採れ	長野県下伊那地方の諺。下伊那地方は八子の巣採りの盛んな地方で、巣内の幼虫も盛んに食べるので、その採り時を示した諺。
<b>植物</b>	里芋の花が咲くと不吉	
	丑の日に野菜の種をまくと、葬式に使うことになる	
	とうもろこしの根が地面に高く出ていると風が多い	
<b>その他</b>	麦枯らしが来たから麦の種も枯れてくるぞ	土佐の諺。麦枯らしはオオヨシキリのこの地方の方言。
	午年は旱魃、辰と巳の年は雨が多い	

表5 漁業に関する民族知識（長澤，2005；高橋・平野，1974より作成）

対象		備考
自然		泡の浮き上がっている所はイワシやコノシロの群れがいる
		ドオゴシ(春一番、雨を伴う)が吹いたら、海苔採り作業は終わりの季節
		夏場に大雨が続くと、あとで赤潮になる
		土用波が岸で大きな音を出し、波の引いた後で泡が多くできると大しけがある
		初雪の降る夜にマスは庄川を下る
動物	哺乳類	船の上では、口をきくにも話をするにも、蛇と猿の話は、絶対にしてはいけない 猿は獲物が「去る」に通じ、蛇は船神様が嫌う。どうしても話をする必要のある際は、猿はエテコウ、蛇はナガモンと呼ぶ。
	鳥類	カモメがたくさんいる下には魚がたくさんいる
	魚類	イワシが湾内に多い年は海苔ははずれ
	その他	かにが陸の方へ穴を掘るとしけが近い
植物		サツキの花が咲くとサツキマスが海から長良川にのぼってくる
		柳の芽が出るとヤマベやイワナも出る
		ヨーラム(トビシマカンゾウ)が咲くと卵を持った魚が海辺にやってくる
		マスの花が咲いたからマスがやってくるゾ
		オバナダコ
		サケイチゴが赤くなった。サケがくるゾ
		ヤチハギが散り始めたからサケがのぼってくるゾ
		フキの葉が十円玉くらいの大きになるとマスは溯ってくる
		卯の花盛りのドウつけ
		藤の花にウグイの仔
		藤の花盛りがアメノウオの匂
		タナゴ花にタナゴ
	ソバの花が咲くとアユが下り始める	

術が普及したこともあり、職人のほとんどが廃業しているが、海外援助での井戸掘り技術に応用されている（「ちば・ふるさとの学び」作成委員会編，2009）。

## 6. 慣習・行事

### 1) 慣習

里山里海では、他者とのかかわりが不可欠である。例えば、米づくりでは田植え、草刈り、稲刈り、そして農業用水の管理など様々な作業があり、「結」や「講」などの組織をつくり、周囲の人々と助け合い、協力して行なわれてきた。しかし、時には軋轢や争いを引き起こすこともあり、軋轢や争いをできるだけ防ぎつつ、起こってしまった場合にはすみやかに解決を促すためのルール

が存在した。例えば、薪や肥料となる木材・草を刈ることは、江戸時代以降は明確にルールが定められてきた。このルールは、大きく2つの制限、すなわち、①利用者を制限する（時期、対象者、利用道具）、②対象資源の利用量を制限する（利用場所、利用量）ものであった。このようなルール及びルールの対象となった資源については、「入会」として各地で見られ、これらは限りある資源を持続可能に利用していくため資源管理システムといえる。

漁業についても、江戸時代以来の慣行を明治34年「漁業法」で制度化された共同漁業権という制度がある。共同漁業権は、漁業だけではなく、漁村社会の基盤となっており、地域的な資源管理システムとして評価も得ている。また、海に



漁業権をもたない人々が関わる「入浜権」「入浜慣行」という考え方もある。日常的に海浜で行なってきた採集や、神事・仏事等の信仰・行事、海水浴・潮干狩・釣りが含まれる。

## 2) 行事

祭りとは、神霊を招き迎えて慰め和ます集団的な行ないであり、多くの神霊が農耕と結びつき、豊作への祈願や感謝、または盆行事に見られるように先祖への感謝・供養の行事である。神霊の宿る自然環境を保全するという共通理解とともに四季折々の自然の変化の中で適切な農作業の記憶の役割を果たした。また、非日常(ハレ)の娯楽・慰労や人々との結びつきを強める役割もあった。生業や盆、正月に関する特色のある祭り・行事を表6・7・8にまとめた。なお、地域の抽出には千葉県の上の社会的地域区分(北澤, 2010)を用い、都市域(人口密度4,000人/km<sup>2</sup>以上の市町村)・里山里海域における都市化進行地域(人口密度100人/km<sup>2</sup>以上4,000人/km<sup>2</sup>未満で、人口増減率105%以上かつ高齢者率20%未満の市町村)・里山里海域における過疎高齢化地域(人口密度100人/km<sup>2</sup>以上4,000人/km<sup>2</sup>未満で、人口増減率95%未満かつ高齢者率30%以上の市町村)について列挙している。

## 7. 文化サービスの変遷

前述のとおり、里山里海において、人々は、自然への畏敬をはぐくむとともに、自然から学び、生活に活かす知恵を生み出し、地域資源の持続的な利用のための仕組みもつくった。しかし、自然環境が減少し、人工物におおわれていく都市化の進行、またインターネットを通じたコンピュータによる情報化は、世界の人々との瞬時のコミュニケーションを可能にしたが、同時に、世界中の自然を疑似体験できる状態が現実となった。しかし、その一方で、日々の生活において人々が豊かな自然に直接ふれ親しむ機会が確実に減少している。前述の内山(2007)が「キツネにだまされなくなった」と表現したが、かつての自然への畏敬も薄れ、民俗知識も軽視され、地域資源の共同利用や年中行事も、衰退もしくは形骸化しているといえる。例えば、地域資源の持続的な利

用のための仕組みの代表例である、集落の共同による農業用水の維持管理も、現在では、全戸での作業が減少し、農家のみが作業する、もしくは人を雇って行なうなど、共同管理が衰退している(図1)。この共同作業の取り組みは、社会的地域区分別でみると、都市域や都市化進行地域での減少率が大きく、過疎高齢化地域では維持されている集落が比較的が多い(表9)。

文化サービスの変遷の特徴をまとめると、自然環境の減少により自然とのかかわりの機会が減少し、その影響が顕在化している状況がみられた。以下では、その特徴的なものを取り上げる。

### 1) 自然とのかかわりの機会の減少

まず、潮干狩や海水浴などのレクリエーションの減少傾向を挙げる。潮干狩は、坂井(1995)によると、大正7年の木更津の畔戸(くろと)の浜を潮干狩場に関する記録では「去月中旬には三輪田女学校の女生が千人近くで潮干狩を催し」(同上:214)とあり、君津の人見浦に関しても、200人から300人近くの人がリヤカーを引っ張り、多くの人々が訪れていたとある。しかし、1980年以降、潮干狩の干潟が埋め立てられ、千葉県における潮干狩り客数は減少した(図2)。

海水浴の起源は医療的効果を目的としたものであったが、近年ではレジャー化している。千葉県の海水浴は、鉄道の発達や自動車の普及に伴い、多くの海岸が海水浴場としてにぎわった。しかし、海辺環境の変化や、プール施設の増加に

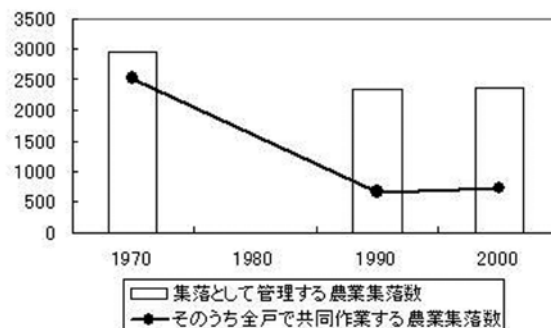


図1 千葉県における農業用排水路の共同作業を全戸で行う農業集落の推移(農林業センサス「農業集落調査」に基づく)。1980年は対象が異なるため除く。

表6 生業に関する特色ある祭り・行事（千葉県教育委員会，2002より作成）

地域別	所在地	行事名	行事実施日	季節	行事概要
都市域	船橋市湊町	水神祭(お船祭り)	4月3日	春	船橋漁業組合等が行なう豊漁祈念祭である。午前10時より船橋漁港に碇泊した漁船上で意富比神社(大神官)により祭典開始。神楽が奉納され、終了後、沖に五穀を蒔きに行く。
	市川市湊	水神祭り	6月30日	夏	午前中に江戸川べりの水神様と御神輿等を飾り置いた所の二ヶ所で儀式があり、夕方には子供達を中心に多くに人出がある。翌7月1日は「ハチアライ」で、役員達が集まる。
	市川市八幡	初卯祭 (八幡の湯花神事)	2月初卯の日	冬	午後1時の儀式後官司舞がある。官司は御幣で湯釜をかき混ぜてから御幣を熊笹に換えて再び官司舞をし、湯花を参詣者等にふりかける。それが終わったら参詣者は笹を奪い合う。
都市化進行地域	四街道市和良比	はだか祭り (どろんこまつり)	2月25日	冬	神社下の御手洗池ですすぎをして体を清め、神田でしめ縄の藁を稲に見立て田植えをする。このあと、ふんどし姿の若者らが神田と社殿を泥だらけになりながら何度も往復する。
	東金市福俵	サナブリ	福俵区内の各ブロックの田植終了後		ヤドの家に集まり、料理をつくり、共同飲食して一同骨休めをする。昭和20年頃まで。
	東金市道庭	宮田植(女相撲)	5月下旬頃	春	旧公平村道庭の稲荷神社の宮田で早乙女は帯を荒縄に締め替えて、神酒を飲んで田に入り植始め。その後、植手の主婦の一人を突き倒し、田の中の相撲が始まる。昭和40年頃まで。
過疎高齢化地域	鋸南町吉浜	稲荷万年講	2月初午と翌日	冬	夕刻5時頃、小学生たちが稲荷神社の青年館に集まって、中学生の指示に従い新聞紙で折った狐面を被り、各家を巡る。子供たちは太鼓に合わせて鈴を振りながら祝詞を唱えて舞を演じる。
	鋸南町勝山	浮島の船渡し (浮島神社祭礼)	7月第三日曜日	夏	勝山港から浮島神社の神輿が船で12時頃浮島神社に到着し、祭典を行なう。午後5時過ぎ、勝山港の埠頭に着岸し、内宿地区等の人たちが歌う鯨歌で神輿は迎えられ、勝山神社に還御する。
	鋸南町本郷浜	豊漁祈念祭 (シヨマツリ)	1月15日(以前1月28日)	冬	漁民が海岸で行なう内房一帯の祈願祭。現在は吉浜と本郷浜で行なっており、勝山地区では行っていない。海神に大漁を祈願し、浜に笹竹を立て注連をめぐらし、祈念祭を行ない、直会をする。
	南房総市(富浦町)	木挽きの太子講(こびきのたいしこう)	1月・12月	冬	年毎に当番(輪番)をきめて、太子像の掛け軸を掛けて、飲み食いしたものであったという。このとき、一年間の手間賃などの申し合わせなどをしたという。昭和43年の1月後途絶えたという。
	南房総市(富浦町原岡)	三夜さまの月待ち	毎月23日	通年	夕食後、当番の家に集まり、三夜様の月待ちをする。以前は稲荷神社などの小高い所に行っておしゃべりしながら月の出るのを待ったが、最近では二・三軒や個人でやるようになっている。
	南房総市(富浦町原岡)	漁業祈念祭 (シヨマツリ)	3月15日	春	シヨマツリはこの地方の浦々ではどこでも行なっていた新年の漁業祈願祭である。富浦の岡本地区では岡本の弁天様で祈念祭を行ない、幣や玉串は海に流す。その後漁民会館で直会をする。

表7 盆に関する特色ある祭り・行事（千葉県教育委員会，2002より作成）

地域別	所在地	行事名	行事実施日	季節(春・夏・秋・冬)	行事概要
都市域	浦安市猫実	川施餓鬼 (かわせがき)	孟蘭盆の頃(不詳)	夏	かつては孟蘭盆の頃、宗派の異なる僧侶達が伝馬船に乗り、境川を拝みながら進んで、川尻に角塔婆を立てた。現在は志蓋塔で拝むだけになっている。
	浦安市堀江	草市	8月11日	夏	8月11・12日に早朝、東学時の境内に草市が立った。盆の飾り売っていて、浦安中の人達が買いに来た。かつては5軒いたのが、途切れた。現在、猫実の豊受神社の境内に1軒のみ。
都市化進行地域	柏市篠籠田	篠籠田の三匹獅子舞 (しこだの三匹獅子舞)	8月16日	夏	西光院の施ガキが終了に近づく、カナ棒引き・花笠・猿舞・カナ棒引き・獅子・笛吹き順で、寺へ練り込む。庭に塩をまき清めてから獅子舞を奉納する。この舞が終わり、送り盆になる。
	柏市 (沼南町片山)	川施餓鬼	8月25日	夏	手賀沼水難者供養のため、沼沿の各地区で行なわれている。片山地区では、塔婆を沼べりに建て周囲を笹等で飾り付け、その前で念仏講中が鉦や太鼓を打鳴らし念仏「十三仏」を唱える。
	東金市全域	お盆(施餓鬼 盆踊)	記載なし	夏	盆市はお盆の道具を売る市で8月4日頃開かれる。施餓鬼は8月14日から8月24日までの10日間で、新盆、二年盆の家庭では近所、親族等が謡講文(ふじ)をあげて、これを僧侶が読誦する。
過疎高齢化地域	鋸南町本郷浜	地藏盆(浦盆)	8月24日	夏	お寺詣り、お墓参りをする。本郷浜地区では念仏講により、水死者の霊を慰めるための浦盆念仏を行なう。浦盆や施餓鬼は、海に近いこの地方ではどこでもみられた行事であった。

表8 正月に関する特色ある祭り・行事（千葉県教育委員会，2002より作成）

地域別	所在地	行事名	行事実施日	季節(春・夏・秋・冬)	行事概要
都市域	船橋市	梯子乗りと木遣り歌 (はしごのりときやりうた)	1月7日～10日の頃(出初式)	冬	正月に船橋高職組合若高会の人々によって木遣りの歌と梯子乗りが演じる。木遣り歌は通し五曲と端もの数曲が伝えられ、梯子乗りは3間半の梯子の上で12から3種類の技を演じる。
過疎高齢化地域	鴨川市花房	春祈禱	1月16日(又は近くの日曜日)	冬	地区の青年等が区の境界と各戸を魔除け、除災のため神楽をあげて区内を巡る。各戸で神楽を演じた後、麻でその家を葺く。正月飾りを集めて神社で焚上げ、汁粉をつくり子供たちにふるまう。
	鋸南町保田	年越しの接待(年越し)	12月31日	冬	大晦日の夕刻、保田区の氏子総代をはじめとする三役たちが保田神社に詣り、初まいるの接待をする。
	南房総市(千倉町忍戸)	湯立て	1月2日	冬	大釜に熱湯をたぎらせ、白衣に草履の氏子(占男)が「オンバ、ヤッサ、ヤッサ ヤッサ浜大漁、岡満作」と三回叫んで、束ねた笹を両手に持ち、熱湯を四周にふりかける。

表9 社会的地域区分別の農業用排水路の共同作業を全戸で行う農業集落数の推移。(農林業センサスに基づく) 1980年は対象が異なるため除く。

	都市域		都市化進行地域		過疎高齢化地域	
	集落管理する集落数	そのうち全戸管理	集落管理する集落数	そのうち全戸管理	集落管理する集落数	そのうち全戸管理
1970	121	92	441	429	320	272
1990	41	3	273	64	333	108
2000	34	3	272	65	298	110

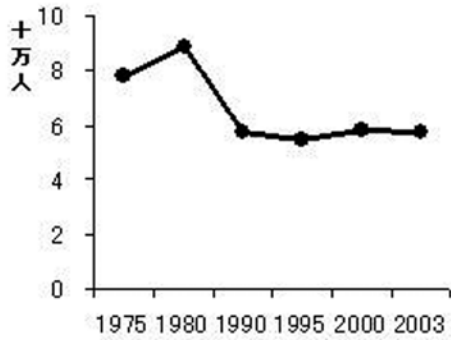


図2 千葉県における潮干狩り客数の変遷 (千葉県統計年鑑 (1975-2003) に基づく)

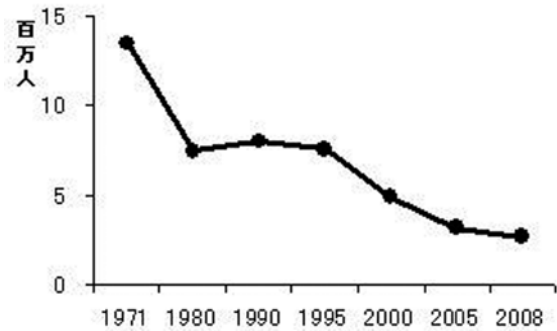


図3 千葉県における海水浴客数の変遷 (千葉県統計年鑑 (1980-2000), 千葉県観光課資料 (1971, 2005, 2008) に基づく)

より、海水浴客数は1970年以降大幅に減少した(図3)。

次に、子どもの野外での遊びの減少を取り上げる。そもそも、子どもにとって里山や水辺での遊びは、動植物に対する認識にもつながっていることを大越ら(2003; 2004)が指摘している。しかし、子どもの野外での遊びは減少傾向にあり、「環境白書平成8年版」によると、1965年頃に境に屋内での遊び時間が野外での遊び時間を上回った。千葉県野栄町での調査(中村, 1982)によると、子どもの野外での遊びは、昭和30年代の魚とり・メンコなどの29種類が、昭和50年代には野球・テレビなどの18種類に減少した。遊び場所に関しても、自分の家や友達の家が増え、田畑、川・用水路、海・浜、寺・神社の境内、山が減少していた。また、松戸市内の保護者の子ども時代の遊び場所について調査した夏秋・有働(1997)によると、「空き地」「原っぱ」が大きな割合を占め、大人の管理下でない遊び場所がかつては多く存在していた。

現在、子どもの遊ぶ場所は、家の中や公園が多く、ゲームや携帯電話で遊ぶ傾向が見られる。この傾向は都市部・農村部に共通である。しかし、両地域の子どもたちが求める遊びは、海や森林、沼などの虫・魚取りなど自然を対象とした遊びである(梅里・中村, 1997)。しかし、自然を対象にした遊び自体にも変化が見られ、習志野・佐倉・成東の小学校児童とその保護者の遊びに着目した芮(1995)の研究によると、過去の児童は自分のいる自然空間と遊び行動が密接に関

係し、地域特性とも大きく関係していたのに対し、現在の児童は自然空間と遊び行動がある程度結びついているものの、地域特性とはほとんど相関していないことを指摘している。また、仙田(1992)によれば、遊びには空間的な余裕だけではなく、時間的・精神的な余裕が前提となる。塾通いや習い事が多くなったことも、野外での遊びが減少したことに関係があるといえる<sup>注4)</sup>。

以上を整理すると、かつての子どもたちの遊びは、遊びの種類も多いこともあるが、同時に遊び場が野外に多く、遊びがその地域の自然空間と結びついていたこと、そして、子どもたちに時間的・精神的な余裕が存在していたことがいえる。

## 2) 健康と安全

自然とのかかわりの機会の減少が影響を及ぼしているものに、例えば、人の健康と安全が挙げられる。横浜市や川崎市を事例に、自然環境と、身体や精神との健康との関係をみた田中(2005)は、地域の自然度と身体不健康度との間に負の相関がみられ、特に精神不健康度との間に強い負の相関がみられたことから、都市の過度な人工化が心身の健康に悪影響を及ぼしていることを指摘している(図4)。

安全の面では、千葉県内の様々な場所での、子どもを狙った犯罪状況を調査している中村・近江屋(2008)によると、被害に遭う割合で、最も高いのが「大都市のベッドタウン」であり、「過疎化の進む農村地域」は最も低かった。また、千葉県内の社会的地域別での犯罪発生率において

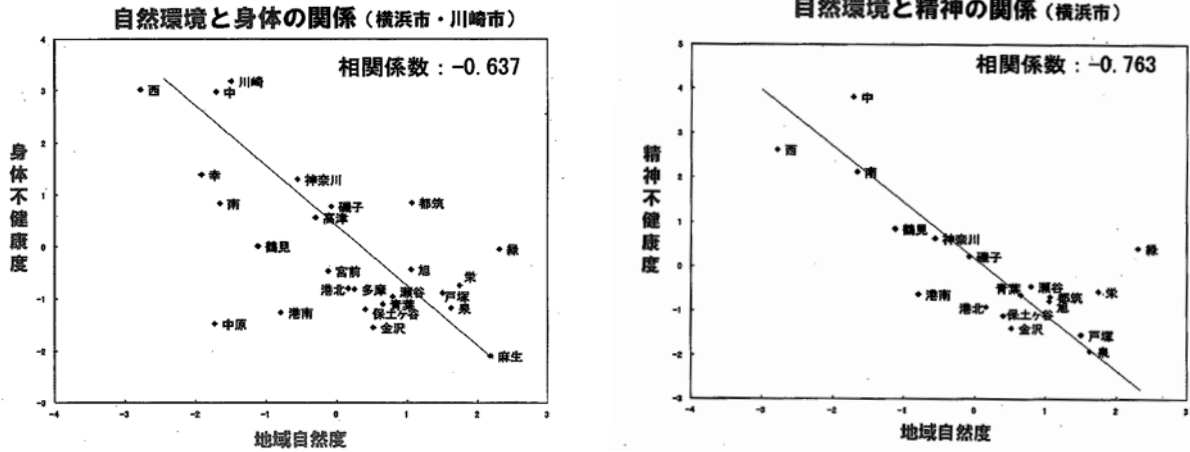


図4 自然環境と身体・精神との関係 (田中, 2005)

も、都市域が高く、それに比べ過疎高齢化地域では低い状況がみられた (図5)。もちろん、過疎高齢化地域は人口が少ないがゆえに犯罪発生率が低いといえるが、同時に犯罪が起こりにくい社会の仕組みが都市域に比べて、依然として残っていることも背景にあると考えられる。

### 3) 愛着や癒し・憩いの場

里山里海の自然は、愛着や癒し・憩いの場としての役割を果たしている。千葉県統計年鑑では、過疎高齢化地域での定住意思の割合が高く、都市域や都市化進行地域での割合を上回っている (図6)。定住意思の上位理由には、「自分の土地や家への愛着」「利便性」「自然環境」が挙げられていた。特に過疎高齢化地域では「自然環境」を挙げている回答が多い。

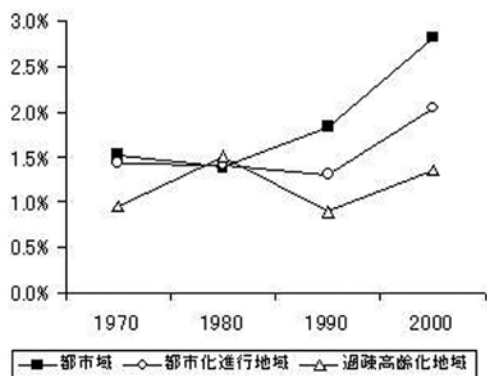


図5 千葉県内の犯罪発生率 (千葉県統計年鑑に基づく)。犯罪発生率は刑法犯認知件数と人口から算出。

そして、自然環境に、癒しや憩いを求めるようになったことで、新たななかかわりも生まれている。たとえば、海に面した開放的な空間は、都市住民を中心にショッピング・レジャーの場として人気があり、多くの訪問客を集めている。さらに、干潟・浅海域では、自然観察会などが行なわれている。森林に関しても、近年では森林セラピーなどを通じて、レクリエーションの場として森林を利用する人が増えてきており (図7)、癒し・憩いの場となりつつある。

### 8. まとめ

本報告では、里山里海の文化がどのようなものか、そして、生態系サービスの文化サービスという概念を用いて、里山里海が私たちにもたらす恵沢がどのようなものか、を整理した。

里山里海において、人々は、長い歴史に培わ

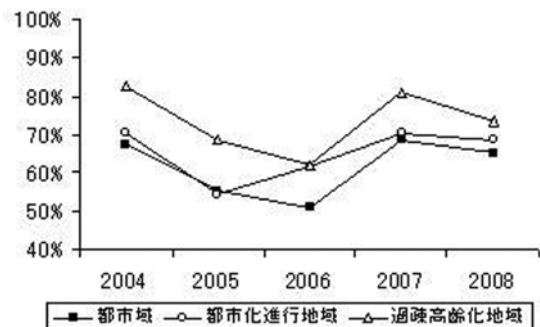


図6 社会的地域区分別にみた定住意思の動向 (千葉県県政アンケート2004年-2008年に基づく)。

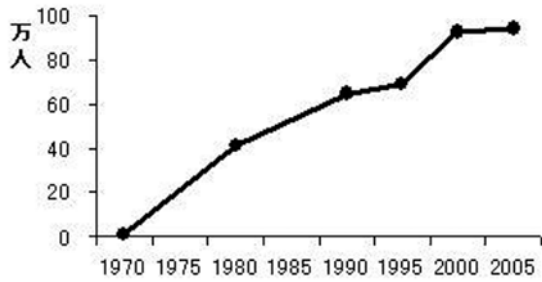


図7 千葉県の県民の森利用者数（千葉県森林林業統計書に基づく）。県民の森は、1970年時点2箇所、1980年時点5箇所、1990年以降は6箇所。

れた自然と調和した生業を通じ、自然への畏敬とともに祭りや行事を日々の暮らしに包含した生活を営んできた。そこでは、自然から学び、生活に活かす知恵が生まれ、地域資源の持続的な利用のための共同利用の仕組みがつけられた。このような生産のための多様なモザイク環境の土地利用は、豊かな生物多様性の保全にもつながった。

このように、里山里海での暮らしを含めた里山里海の文化は、豊かな生物多様性の保全とその継承にもつながっていたことがわかる。そして、里山里海からの恵みは、食料や日用品の原料だけではなく、私たちの生活にとって欠かすことのできない健康や安全、癒しや憩いといえる。しかし、現在、里山里海の減少に伴い、その多くが失われている。里山里海の文化からの学びは、私たちの社会が持続可能であるためにも重要であり、近年では、自然とのかかわりを求める動きも生まれており、これらの動きが今後活発化することが望まれる。

## 9. 謝辞

本報告をまとめるにあたり、川井恵美子氏・玉川恭子氏にデータ入力等の作業を行なってもらった。厚く謝意を記したい。

## 注

- 1) もちろん、ヨーロッパでも全てが自然と人間を切り離して捉えるのではない。アイルランドのケルト文化は、自然の中に神を置き、自然に

感謝しながらその恩恵を頂き、他文化を排除することなくお互い影響を受け合いながら育まれた。

- 2) 例えば、キリスト教は、異教の神々を否定し、雨や豊穡などを祀った神を「悪魔」として位置づける。しかし、日本人の自然観も特に戦後以降、大きく変化していることにも留意する必要がある。かつて、自然は「シゼン」ではなく「ジネン」と発音され、「オノズカラシカリ」と訓読みすると、「有意ではない」「自我の働きから生ずる意図がない」「我がない」という意味であった（内山，2007）。しかし、明治後期以降「シゼン」と発音するようになったことで、人間は自然を人間から分離させ、「自然（シゼン）」という客観的な体系を生み出したと内山（同上）は述べている。
- 3) 神という漢字は「新漢語林」によると、「音符の申は、いなびかりの象形で天神の意味」とある。大野（1997）によると、カミそのものの語源は、カガミ（鏡）、畏（カシコミ）、カヒ（太陽）、カミ（上）など説が複数あるが、いずれにも疑問が呈されており、定まっていないとのことである。
- 4) 仙田（1992）は、かつての野外での遊びが習い事に置き換えられていると指摘している。例えば、「野球もどき」のボールゲームが少年野球クラブでの野球に、小川での水遊びがスイミングスクールでの水泳に変化している。

## 10. 引用文献

- 千葉県. 1999. 千葉県の歴史 別編 民俗1（総編）. 676 pp.
- 千葉県教育委員会（発行）（千葉県立大利根博物館（編））. 2002. 千葉県祭り・行事調査報告書. 294pp.
- 「ちば・ふるさとの学び」作成委員会（編）. 2009. ちば・ふるさとの学び. 91pp.
- 環境庁（編）. 1996. 環境白書（総説）（平成8年版）. 515pp.

- 北澤哲弥. 2010. 里山里海の生態系評価における社会的地域区分手法. 千葉県生物多様性センター研究報告 2 : 54-57.
- 大野晋. 1997. 一語の辞典 神. 136pp. 三省堂, 東京.
- 間瀬啓允. 1998. 環境問題に宗教はどうかかわるか. In 加藤尚武 (編), 環境と倫理—自然と人間の共生を求めて, pp. 169-186. 有斐閣, 東京.
- 宮田登. 1994. 神と仏. In 網野善彦ら (編), 日本民俗文化体系 4 普及版 神と仏 民俗宗教の諸相, pp. 5-64. 小学館, 東京.
- 長澤武. 2001. 植物民俗. 312pp. 法政大学出版局, 東京.
- 長澤武. 2005. 動物民俗 I. 247pp. 法政大学出版局, 東京.
- 中村攻. 1982. 戦後農村地域の子どもの遊びと遊び場の変遷過程に関する調査研究—千葉県野栄町東栢田集落のケース・スタディ. 日本建築学会論文報告集 312 : 155-163.
- 中村攻・近江屋一朗. 2008. 千葉っ子を犯罪から守る. 73pp. 千葉日報社, 千葉.
- 夏秋英房・有働玲子. 1997. 子どもの遊びの変化とその要因についての一考察—「子どもの遊びと生活」調査の基礎集計をもとにして. 聖徳大学研究紀要短期大学部 30 号 : 107-113.
- 大越美香・熊谷洋一・香川隆英・飯島博. 2003. 水辺における子どもの遊びの変遷と動植物に対する認識. ランドスケープ研究 66 (5) : 733-738.
- 大越美香・熊谷洋一・香川隆英. 2004. 里山における子ども時代の自然体験と動植物の認識. ランドスケープ研究 67 (5) : 647-652.
- 乙竹孝文・小林裕美・寺嶋政長・福田久. 2003. 野田の樽—その歴史と技術—. 町と村調査研究 5 : 23-66.
- 谷川健一 (編). 1990. 渚の民俗誌. 506pp. 三一書房, 東京.
- 坂井昭. 1995. 干潟の民俗誌. 254pp. 三陽工業, 千葉.
- 仙田満. 1992. 子どもとあそび. 205pp. 岩波書店, 東京.
- ケビン・ショート (森洋子訳). 2003. ドクター・ケビンの里山ニッポン発見記. 247pp. 家の光協会, 東京.
- 鈴木邦雄. 2006. マネジメントの生態学. 304pp. 共立出版, 東京.
- 高橋在久・平野馨. 1974. 日本の民俗 千葉. 273pp. 第一法規, 東京.
- 竹村牧男. 2006. 「共生学」の課題と展望. 竹村牧男・松尾友矩 (編), 共生のかたち—「共生学」の構築をめざして, pp. 1-18. 誠信書房, 東京.
- 田中貴宏. 2005. 都市環境の人工化と生活者の健康との関係について. 日本生態学会関東地区会報 : 15-20.
- 内山節. 2007. 日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか (講談社現代新書). 178pp. 講談社, 東京.
- 梅里之朗・中村俊彦. 1997. 日本の農村生態系の保全と復元Ⅳ : 子どもの遊び空間にはたす農村自然の役割. 国際景観生態学会日本支部会報 3 (4) : 61-63.
- 和辻哲郎. 1979. 風土—人間学的考察 (岩波文庫). 299pp. 岩波書店, 東京.
- 柳田國男. 1999. 氏神と氏子. 柳田國男全集第 16 巻. pp. 239-288. 筑摩書房, 東京.
- 芮京祿. 1995. 児童の自然体験の変化と地域特性との関連. ランドスケープ研究 58(5) : 245-248.

著者：本田裕子 〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2 千葉県立中央博物館内 千葉県環境生活部自然保護課生物多様性戦略推進室生物多様性センター y.hnd21@mc.pref.chiba.lg.jp  
 "Changes in culture and ecosystem services of SATOYAMA-SATOUMI." Yuko Honda, Chiba Biodiversity Center, 955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan. E-mail: y.hnd21@mc.pref.chiba.lg.jp